



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈資料〉 1 われわれの研究の将来
Author(s)	教育方法学研究グループ
Citation	教授学の探究, 3, 121-122
Issue Date	1985-03-26
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13526">https://hdl.handle.net/2115/13526</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_p121-122.pdf



1984年11月9日、北大教育学部では、下記の研究計画委員会の要請をうけて、各グループから「われわれの研究の将来」をテーマとした報告がなされた。この「教育学部フォーラム」に提出した教育方法学、及び体育方法研究グループのレポートを資料1としてのせる。あわせて、いわゆる「70年構想」とよばれている文書の一部も参考のため資料2に掲載しておく。

1984年教育学部フォーラム

それぞれの研究に内在する展開のあり方（論点・問題点とその解決に向けての模索の方向）、さらには学部将来のあり方とそれに対する自己定位の模索について、展望と現状を“生き生きとした形”で、お伝え下さい。

研究計画委員会

<資料>1

われわれの研究の将来

教育方法学研究グループ

I 経過と現状——70年構想から現在まで

- (1) 70年構想 ① 現代科学の構造を、“すべての子どもに理解可能な順序”の原理で再構成することが可能であることを仮定する。
- ② 現代科学の構造を正確に反映した教育内容を、授業過程を含めて客観的な対象とすることが可能であることを仮定する。（授業書等）
- ③ この授業書は、授業によって検証をうけることが可能であることを仮定する。ただし、この検証は、正確・精密なものであってはならない。

- (2) 70年構想の展開 上のような諸命題は、内外の教授学的諸研究の動向を検討する作業を経て設定された。そしてこれらの仮定は、いずれも教授学的命題であろう。

しかし、これらの教授学的命題を、他の教授学的命題によって豊富化し、展開する筋道、あるいは他の教育学的命題と関連づけ、意味づける作業…普通はこれこそが教授学の研究と考えられるだろう……はほとんど進められなかった。

その度合は、70年構想が建てられた時点よりも一層徹底したものであった。たとえば、授業書の検証の過程において、その授業書に内在する教授学的仮説も同時に検証をうけるという当初の予想に反して、そのような検証に相当する吟味はほとんどなされたことがないし、はたして授業書に教授学的仮説が内在しているか否かさえ、自覚的に問うことがほとんどなかった。

従って進められたのは、教授学研究というよりは、直接的には教科教育研究である。そのように経過した理由は、各教科、各単元、トピックごとの授業書作成にとって、最も有効な理論的土台を提供するのは、それらのテーマ、トピックごとの専門研究の成果であったからにはかならない。（例「ひかりごけ」→小笠原克）

- (3) 現在の局面 ① 教授学については、教科教育研究をその存立基盤としながら、直接的には教授学として展開しないことが、もっとも教授学的に意味のあることだと考える。
- ② その存立基盤である教科教育研究自体、問題がより具体的であるにして

も、はたして研究と呼びうる状態であるか否か、疑わしい。

- ③ にもかかわらず、教科教育研究を、研究として成立させるための前提的な作業（授業書づくり、授業プランづくり）は、各教科において一定の蓄積をみている。

## II 今後の展開の方向

- ④ 授業書、授業プランづくりをひきつづいて研究の基底とする。（「ひきつづいて」というよりはこれまでの作業を習作の段階と考え、本格的な授業書づくりはこれからの課題である、という考えも研究グループ内にある。）
- ① これと並行して開始されるべき課題は、教科教育研究を、研究として確立させることにある。教科教育研究の全体構造は未だ明確ではないが、各教科において《子どもにおける、認識の発展の論理》を具体的に提示することが、その出発点であり、かつその中核部分となろう。

この課題の具体的展開は、教科ごとに異なる様相で開始されるだろう。

- a. 言語教育……言語・文法の系統的教育の可能性を追求すること

文芸学的諸概念の批判的検討

- b. 自然科学教育……物理学の三領域で作成した授業書を、たとえば《階層間の移行と相互作用の観点による古典理論の再構成》という視点から、ひとつの論理的なまとまりをもったものとして意味づける課題

- c. 数学教育……量と数の関連における数学的認識の発展の諸相の数学論的展開

- ② これらの専門研究を、そのまま教授学研究であると居直ることも可能である。しかし、70年代に構想された、教科教育研究における法則（概念の本質的関連）と、教授学における法則との、準同型対応説は、その後具体的な展開をみていないにしても、むしろ上のような“居直り”を支える根拠として強く働きつつけているとあってよいだろう。

## III 学部の将来のあり方とかかわって……当分は解決されそうにない課題……

- ① 歴史的・社会的事実としての教育の発展法則の解明の視点に関する共同の模索
- ② 心理学的立場からの認知研究との方法論上の交流

われわれの研究の将来

### 体育方法研究グループ (1)

#### 1 経過と問題点

われわれの研究グループでは、すべての子どもに運動文化の特質を習得させるための内容と方法に関する教授理論をつくりあげることが目標としている。

しかし、科学としての体育教授学的研究が未確立の現在、研究方法の検討とともに、将来を展望して次のような条件を備えた実践的研究を蓄積してきた。

それは、教材の順序構造と授業過程を統一した教授プログラムをつくり、実験授業によってそのプログラムの良否について検討してきたのである。そして、このことは、教授学的研究にとっての仮説づくりに必要な作業だと考えている。どのような作業をおこなってきたかについては、項目のみを示し、内容については、後述の展開において若干紹介することになる。